



Data

監督・脚本：オフィル・ラウル・グレイツァ

出演：ティム・カルクオフ／サラ・アドラー／ロイ・ミラー／ゾハル・シュトラウス／サンドラ・シャーディー

■ショートコメント■

◆本作はイスラエル人の若手監督オフィル・ラウル・グレイツァの長編監督デビュー作。ナチスドイツによるユダヤ人の迫害はよく知られているが、第二次世界大戦後、アメリカの支援によって1948年に建国されたのがイスラエルだ。したがって、戦後でもドイツとイスラエルの仲が良くなるはずはないが、さて本作では・・・？

◆冒頭の舞台はベルリン。ドイツ人のケーキ職人トーマス（ティム・カルクオフ）が経営する小さなカフェを訪れたイスラエル人のビジネスマン、オーレン（ロイ・ミラー）はトーマスが作るケーキをいたく気に入り、常連客に。そのうえ、ベルリンへの出張時にはいつもイスラエルに住む妻子へのお土産として持って帰るように。なるほど、なるほど。そう思っていると、アレレ、この2人は・・・？今ドキは同性愛の映画が大流行だが、本作がそうとは思わなかった私はビックリ！

ところが、せっかくそんな仲になったのに、ある日急にオーレンの携帯に連絡がとれなくなったが、それは一体なぜ？

◆うって変わって、その後の舞台はイスラエルのエルサレムに。そこでは、オーレンの妻アナト（サラ・アドラー）が新規にオープンしたカフェを、ベルリンからやってきたトーマスが1人で訪れるシークエンスが登場する。そして、ある日以降トーマスはアルバイトとしてアナトの店で働くことに。黙々と働くうえ、クッキー作りが上手だったから、こりゃ便利。お店でもそのクッキーの人气が高まっていくが、イスラエルには何かとややこしい食品に関する法律規制があるらしい。

そんな問題も興味深いのが、本作はここでも、トーマスとアナトとの間にあつと驚く展開

が……。こんな男女の愛の展開があることにビックリ！

◆1981年生まれのおフィル・ラウル・グレイツァ監督による本作の導入部では、何とドイツ人とイスラエル人の男同士の愛が描かれる。そして、本体のストーリーはそのドイツ人の男とイスラエル人の妻との男女の愛をテーマにしているから、ビックリ！その2つの愛の展開ぶりをしっかり注目したい。

ユダヤ教では“安息日”が重要だから、本作のストーリーでもそれが再三登場するが、日本人にはそれはわかりにくい。そして、チラシによると、本作は「悲しみから救ってくれたのは、夫が愛した男性だった—哀愁漂うエルサレムを舞台に、国籍や文化、宗教や性差を超えてめぐり逢う男女の人間賛歌。」と紹介されている。まさにそのとおりだが、いわば敵同士ともいえるドイツ（ベルリン）とイスラエル（エルサレム）を舞台とした、そんな2つの愛の物語にビックリ！いい作品であることは間違いないが、私にはなかなかついていけない面も。そのため、とりあえず本作はショートコメントだけで……。

2018（平成30）年12月20日記